

マフィア

レオナルド・シャーシャ
竹山博英 訳

1956年の夏、パレルモは禁酒法時代のシカゴのような様相を呈していた（新聞記者たちによれば、それはアックワサンタの青果市場支配をめぐる2つのマフィアグループの抗争だった。警察はこうした見解ではなかったようだが、新聞記者たちのほうが正しかった）。その時、シチリア州議会議長であったジュゼッペ・アレッシ国会議員¹⁾は、ミラーノの新聞「イル・ジョルノ」紙のインタビューで、驚くほど無邪気な発言をした。少なくともインタビューをした記者が、アレッシの言明をゆがめてまとめたのでない限り（こうしたことはしばしば起こる）、事件を矮小化しようとした意図は明らかだった。アレッシは実際にこう言った。そう、確かにシチリアには貧しい人たちがいる、お望みなら悪い性行の人たちと言おう、彼らはあえて旅人から財布を盗むような悪事を働く。これが南部のマフィアだ。だが北部のマフィアを見たまえ、それは同盟した大産業家たち、株式市場の投機、株価操作のことだ。

この北部のマフィアとは、自治論者のジュゼッペ・アレッシのかねてからの主張だ。これは確かに、まったく根拠がないわけではない。彼の若き協力者ジュゼッペ・ヴィンチはまさに『北部のマフィア』という題名の、注目すべき評論を書いている（ガエターノ・サルヴェミニも、ある種の賛意を持ってこの問題を扱ったことがある）。しかし南部のマフィアと比較して、それに有利になるように、北部のマフィアと呼ぶのは、やり過ぎである。ガエターノ・バルダッチにもそう思えたようだ。彼は「イル・ジョルノ」紙の編集長で、シチリア東部出身の、つまりマフィアを知らない地域のシチリア人である。しかしだからと言って、アレッシがある種の悪意を持って発言したと疑うことはできない。アレッシは論理的厳格さと感情的混乱を交互に見せるような、矛盾に満ちた人物である。そして彼のシチリアへの愛は、時には燃える上がる郷土愛を導き出す。

アレッシと同じように、多くのシチリア人が、善意から、マフィアを散発的な犯罪事件に矮小化する。そして広い行動範囲を持ち、公的生活に確かな手がかりを持つ犯罪組織の存在を認めるのは、シチリアに対する侮辱であると考え。例えば、アレッシはカルタニッセッタとパレルモを行き来しながら生活し、刑事弁護人として豊富な経験を持っているので、その現象の真の大きさや、マフィアと支配階級の衆知の共謀関係を知らないはずがない（アメリカではシチリアよりさらによく知られている）、と私は確信している。しかしいったん「本土の」新聞記者を目の前にすると、現象を矮小化し、むしろ北部のマフィアを少しだけ非難する（根拠のないものだったが）ようになってしまったのだ。

シチリア人のジュゼッペ・ロンゴも同様に、最近、「政治文学観測者」誌に、ある長い記事を書いた。その記事で彼は、アメリカ人のエド・リードとイタリア人のレナート・カンディダ²⁾が、最新刊の二著（『マフィア』と『このマフィアなるもの』である）で見せた矛盾や無邪気さを、否定しがたい熟達さで、しつこく暴いている。確かにこの二著に、矛盾や無邪気さが存在しないわけではない。し

かしこの記事が言うように、本を読み終わると、マフィアについて新しいことは何も分からず、その現象は不定形の捕らえがたいものとして、つまり「霧囲気」として残るままである、と結論づけるのは正当とは思えない。

それはおそらくロンゴが望むように、「霧囲気」なのかもしれない。しかしそれは銃を撃つ「霧囲気」で、しかも「ある特定の方向に」発射するのだ。それは機関銃の連射という形で、組合指導者の方向に銃弾を浴びせかけることを好む。「だれに銃を撃つのか言ってくれば、きみの正体を告げよう」少なくともこうは言えるはずだ。従ってその現象は初めにそう見えたように、あいまいでも、言い表せないものでもないのだ。

リードは新聞記者で、しかもアメリカ人なので、問題を拡大し、いくつかの点では小説化している。イタリアに関する部分は空想に走ったりしている。一方カンディダの欠点は、ある箇所では自分の主たる仮説を見失い、根拠に乏しい「文学」に身を譲り、確かに印象深い、マフィアの明確化には「機能を果たさない」犯罪の記述に身を委ねていることである。

リードの本はシリーズものの分冊小説のような書き出しで始まる。「1915年の春のある日、3人の若者が、シチリア島のある開けた谷間にある、草の茂った斜面に腰を下ろしていた。それはパレルモ周辺の「黄金の窪地」に広がる谷間で、遠くには海が輝いていた。暑い日で、蚊の大群が3人のまわりでうなり声を上げていた。彼らはのしりながら、刺してくる蚊を時折平手打ちで殺していた。3人はヴィート・ジャンノーラと、その兄弟のジョヴァンニ、そしてアルフォンソ・パニッツォラだった」まさにその日、灼熱と蚊に悩まされながら、3人はアメリカに、犯罪の才能を持ち出すことを決定する。彼らは出発し、ミズーリ州のセントルイスを実験のために選び、上首尾に成功を収める。そしてセントルイスからアメリカ全土に、墮落したフロンティア・スピリットのようにして、マフィアの組織を広げるのである。

リードによれば、アメリカのマフィア植民地と本国シチリアとの関係は、「独立宣言」で解消されるどころではなくて、非常に強固に保たれていた。絶え間ない移民の流入を考えるなら、そのことに疑いはない。それは長年にわたってイタリアの捜査当局の捜査対象となっていた人々をシチリアから出発させ、アメリカで確実に受け入れる体制を保証する、非合法組織の要請に応えたものであった。彼らは手配中であつたり、あるいは生来、山賊行為に適していたため、「外縁で」生きるものたちであった。また不意に法の手落ちることを恐れる殺人犯、家畜泥棒、故買屋であつたり、理由はどうあれ、憲兵の視線の重さを常に恐れる前科者であった。そしてさらに脱走兵や、何もしないことと安楽に暮らすことを理想とするような、自由を渴望する家庭の息子たちもいた。彼らはこうした希望を実現するために、だれに助けを求めたらよいのか知っていた。もちろん、アメリカでシチリアのマフィアが力を獲得しつつあったので、貧しさに強いられて移民に出る正直なものたちもマフィアに助けを求めざるを得なかった。だが彼らがアメリカに着いても、正直な仕事につけるのかどうか、確実ではなかったのだ。

アメリカの多くのシチリア人と知り合って、私は個人的にある印象を受けた。つまり彼らにとって、マフィアに属すること、あるいはマフィアを堪え忍ぶことは、言ってみれば、ある合法的価値を帯びる、という印象である。初歩的な実用主義を、裕福さと豊かさの宗教を、「競争」の神聖化を信念として持つことによって、アメリカに移住させられた貧しいシチリアの日雇い労働者の頭の中では、マフィアの問題は、ヴィットリオ・エマヌエーレ・オルランドさえ裏書きをしたあの「道徳

的」性格を失うのにほど遠かった。アメリカのシチリア人は、貧しさや法的訴追のために移民を余儀なくされた時から（それは紛れもなく精神的外傷を伴っていた）、ある種の精神的、道徳的停滞状態に陥っていた。

彼らの方言が発展を見せなかったように（もはや使われなくなった方言の辞書を作りたい人は — 例えばフォークを意味する *burcetta*、上着を意味する *bunaca*、ハンカチを意味する *muccaturi* など — それをアメリカのシチリア人の中で探すべきである）、彼らの中では、シチリアは思い出の中で固定されている。だから今日、里帰りすると、家々に電気や水道が引かれ、ラジオがあるので驚くのだ。それと同じように、彼らにとって、マフィアは40年ほど前のものに留まっている。また選挙の時に票を集める非合法的徒党組織に関しては、アメリカの民主主義はより大規模だった。サボイア王家の統治下である種の訓練を積んだものは、シチリアでは謂わば手工業的段階に留まっていたであろうものを、アメリカで産業的規模で適用できる方法を見いだしたのだった。選挙の時に、リトル・イタリーはかなりの重みを持つことになった。数百万の南イタリア人はアメリカが提供する労働と裕福さに満足し、幸福であり、選挙の二者択一には無関心で、従って選挙のボスの取り決めには完全に協力的であった。フリーメーソンとマフィアの狭間で、リトル・イタリーの支配は遺漏を許さなかった（おそらく今でも許していない）。

リードの語る事実から、マフィアが暗躍する、黙約と保護の環境が存在することは明らかである。それはシチリアを縮小して写したような環境である。そこで「偶発要因」（確実な仕事、正当な給料、家、自動車など）の差が巨大なことを考えると、アメリカでのマフィアの繁栄を説明するには、「人種差別的」理論に走るべきかと思えてしまう。しかし実際のところ、人種から出発しても、その現象を解明できるわけではない。常に、歴史から出発し、その中で問題を解決すべきなのである。

シチリアで元来そうであったような農村的現象から、マフィアはアメリカで、産業資本主義の墮落した表現になった。それは実質的には、支配階級に忠実のままである。つまりシチリアでは、農民の土地への渴望から領地を守り、アメリカでは流血のスト破りを指揮したのである。しかし無数の不規則や例外を考慮すべきである（例えばパレルモ県のバゲリーアでは、マフィアは改革的法人として活動した。大土地所有者に恐怖を抱かせたおかげで、マフィアは小土地所有を実現した）。

しかしながら、不規則や例外にもかかわらず、最も確かなマフィアの定義は以下の通りであると信じる。つまりマフィアとは、構成員の不法利得を目的にした犯罪組織で、所有と労働の間に仲介的要素として介入するものである。もちろんそれは寄生的仲介であり、暴力的手段で強要されるものである。労働側の力が大きくなるにつれて、そうした仲介は、使用者側に有利になるように実現されるのは明らかである。なぜなら使用者側は防御的位置に追い込まれるからだ。要するに労働者がマフィアの仲介を要請することはなく、アメリカでのように、それを受け入れることに留まるか、シチリアでのように、それを堪え忍ぶことに留まる。

ここで本質的な疑問が出される。このように定義されたマフィアは、なぜシチリアとアメリカだけで生育しているのか？ 所有と労働の間に争いがある他の国々で、なぜ同じような仲介の形態が生まれぬのか？ もし今日、1915年のジャンノーラ兄弟とパニッツォラのように、3人のシチリア人がパレルモを出て、ミラーノ征服に向かったら、その企てに成功するだろうか？

リードの語る、セントルイスの征服と呼べそうなその図式に従えば、こうしたことが起こるだろう。3人のシチリア人は、多くのシチリア人が店を構えるミラーノの通り、サン・グレゴリオ通りに

行くだろう。そしてすべてのシチリア人の商店主に週ごとの税を課すだろう。抵抗を試みるものもあるだろうが、そのものは見せしめとして殺され、他のものたちは何も言わずに金を払うだろう。この当初の成功は組を大きくするだろうが、相対的なものだろう。この時点で、油のしみは地区から地区へ、町中に広がることだろう。しかし「本土に」特有の（南部人にとって「本土」のものである）要素が、こうした遊戯に入り込んでくる。それはこのようなものである。つまり労働者意識、と常に呼ばれるもの。そして、あらゆる犯罪的介入とは無縁の、労働の側が作り出す選挙慣行。「黙約」の完全なる欠如。および南部では共犯関係、犠牲、危険負担という言葉で表される友情感覚の完全なる欠如。そして最後に、その結果として、公的権力を効果的に腐敗させることの不可能性。

従ってマフィアの支配は、ミラーノのような町に存在し、作用しているこうした要素が、完全にか、部分的に欠如している場所ではしか実現されない。労働者の階級意識が欠けているところでは、マフィアは、労働組合の請求と使用者側の防御との間に介入し、究極の「日和見主義」をすることで、労働組合に取って代わることができる（かつてのシチリアで、そして今日のアメリカで見られるように）。一方労働組合が、使用者側の勢力として存在するマフィアに対して、歴史的具體性を持って対抗するところでは、マフィアは「下部警察」、反動的前衛主義、治安維持的性格を持つ（それはプロレタリア大衆を排除するような国家の秩序の理想に従う）。このことから以下のようなことが推定される。アメリカではマフィアの役割は労働者、使用者によって、暗黙のうちに受け入れられる。一方シチリアでは、仲介はもはや使用者側からのみ受け入れられ、要求される。労働者はそれから逃れ、解放されようとする。

多大の努力を払って心を平静に保ち、抑圧体制の非難すべきところを非難する必要があるのだが、ファシズムは—少なくとも心理的地平で—シチリアマフィアの権威を奪うのに幾分かは貢献したと認めるべきである。人々は重罪裁判所の檻にマフィアのボスやその保護者がいるのを見た。不法に取得された富は、裁判費用や法廷の大御所たちの請求書の支払いに消えた。恐れられた殺し屋は不法移民の道をたどった。村全体を震え上がらせたものたちは、モーリ³⁾の軍隊を目の前にして震え上がった。カロージェロ・ヴィッツィーニ⁴⁾本人も流刑地に向かう護送車にその姿が見られた。マフィアの神話は地に落ちた。「マフィアのボス」という言葉は軽蔑とあざけりの色合いを帯びた。しかし残念ながらマフィアの活動は止まなかった。アメリカ軍が上陸し、すぐに市町村の要職に高名なマフィアのボスを据えようとした時、マフィアがある種の偽りの苛酷さを味わったのが明らかになった。それがどれほど執拗で、長続きしようとも、はかない運命と定められていたのだ。

リードはアメリカマフィアの実態をよく知っているが、シチリアのマフィアに関しては勘に頼っており、二つのマフィアの間を定めるこの決定的な時期を無視している。それはアメリカがシチリアを軍事統治した時期である。アメリカ軍事統治期に、即座に職と富を得たすべてのマフィアのボスのリストを作ったら、興味深いだろう。そしてその手慣れたやり方で、いかにしてすぐに闇市場を組織したか語ったら、なおさら興味深いだろう。アメリカの参謀本部の将校が、上陸計画とともに、「信頼すべき人々」の正確なリストを携えていた。それは—とんだ偶然だが！—マフィアの精髓だったのだ。ここにアメリカマフィアの支配力と、彼らがシチリアマフィアと常に関係を保ってきた、最上の証拠が得られるのである。

リードは、ファシズムがマフィアとある種の派手な戦いをしたにもかかわらず、ひそかに共生関係を保っていたと確信している。しかし彼は、アメリカ軍事統治期にシチリアで、いかなる要素がマ

フィアを新たな権力の地位に再度つけたのか、発見する方向で探索を進めていない。これは残念なことだ。なぜなら彼の本には、注意深い考察と補足にふさわしい、ある章があるからだ。それはCID捜査官のディッキーが、いかにしてイタリアで、ムッソリーニの時代も連合軍の統治下でも、裏世界の重鎮だった、ヴィート・ジェノヴェーセ⁵⁾を逮捕したか、語っている章だ。この捜査官は、リードの言によると、「イタリアの連合軍占領地域のある部分に広がっていた、犯罪と陰謀の広大な網の目に直面した小さな原子」であったが、その彼が、アメリカでは殺人で手配され、イタリアではGMA(連合軍軍事政府)の通訳として要職にいたジェノヴェーセを逮捕するのに成功する。この通訳の身分は、ジェノヴェーセが闇市場に君臨するのを非常に容易にしていた。逮捕の時点で、ディッキーは、ジェノヴェーセがGMAの将校の署名付きの、以下のような信任状を持っているのを発見した。つまりジェノヴェーセは「心底から正直で、実際のところ、いわゆる信頼の置ける市民職員の腐敗と闇売買のいくつかの案件を告発した」、「職務に対する信義ある信頼感と確実な信託に値する」といった内容の信任状である。要するにディッキーはジェノヴェーセの逮捕に成功するのだが(2人のイギリス兵の助けを借りて)、そこから災難が始まる。それはジェノヴェーセにとってではなく、ディッキーにとってである。なぜならイタリアでもアメリカでも、だれもその逮捕の責任を取ろうとしなかったからである。CIDのあわれな捜査官にとっては、それは本当のオデュッセイアになった。彼はジェノヴェーセをニューヨークに移送することに成功するが、国立の刑務所に滞在していた原告側証人が毒殺されてしまい(ウッチャルドーネ刑務所でピショッタがそうされたのと同じだ!)、ジェノヴェーセの有罪を証明するのは不可能になった。

この話を補完するために、リードは補遺に、ニューヨーク管区検事によるディッキー捜査官の尋問調書を収録している。そして以下に調書から、例のポレッティ大佐⁶⁾に関するくだりを引用する。イタリアが、そして特にシチリアが、大いにお世話になった人物だ。

問 要するにあなたは、逮捕したこの被拘留者のために、約6ヶ月ほどやっかいに巻き込まれたのですね？

答 まさにそうです。そしてそれは平の捜査官にとっては重大な責任でした。というのは、私が報告書を書いた後、彼の拘留の責任は他のものが取るべきだったからです。

問 誰かがその義務を負うべきだったが、だれもそうしなかったと言いたいのですか。

答 まさにそうです。

問 そこでローマに行って、ポレッティ大佐のところに出向いたと言っていましたね。

答 そうです。

問 彼と話したのですか。

答 いいえ。

問 でも彼の事務所に行ったのでしょうか。

答 朝の10時頃に事務所へ顔を出しましたが、彼と話せませんでした。テーブルには空の酒瓶が何本かありました…眠っているように思えました。テーブルの上に腕を組み合わせて置き、その上に頭をもたせかけていました。

問 その後、また彼に会いに戻りましたか。

答 2度出かけました…両方とも事務所は人でいっぱい、そのほとんどが若い女性でした。またテーブルに空瓶が並んでいました…大佐はあちこち歩き回り、女性たちに指示を出していま

したが、事務所のまじめな仕事ではなく、冗談か暇つぶしで、そうしているように思えました…

これはたぐいまれなる一節だ。空の酒瓶と娘たちで GMA が象徴的に表現されているためだけでなく、あわれなディッキーが3度もポレッティと話せなかったためである。ヴィート・ジェノヴェーセが簡単にできた会談を、CID の捜査官が実現できなかったのだ。この話の教訓はここにある。

リードの本は勇気あるジャーナリズム活動の経験から生まれた。一方レナート・カンディダの評論は異なる経験から生み出された。しかし数ヶ月の差で出版された2冊の本は、お互いに補い合い、補完していると言える。マフィアは他の国々に進出したが、本部はシチリアに置いている、というリードの仮説は、カンディダの同意を得ていないが（だがリードの本をまだ読んでいなかった）、少なくともシチリアのマフィアとアメリカのそれが同じ方法を用いているという点で、この仮説は評価されるべきである。カンディダが次のように言う時、つまり「経済面でのマフィアの進化は、可能な限り多くの分野を包含する。それはビールの取り引き（通称ジ・ガスパリーノという、大変恐れられている、パレルモのマフィアのボスの手中にある）、果実、精肉、密輸たばこ、魚、野菜、硫黄とその副産物、岩塩の取り引きを含み、さらには道路、建設、農業、鉱業工事の入札から、通常の経済活動の源泉より支払われる疑似監視（「保護監視」と呼ばれる）にまで至っている」と述べる時、要するにカンディダが上記のように言う時（後に分かるように、彼は確実な証人である）、シチリア＝アメリカ・マフィアが統一的組織を持つことはもはや疑うことはできない。

カンディダの人物については長い説明が必要だろう。しかし出版社の紹介文が著者の正体をぼかしているの、書評者もそれに習っている。だが『このマフィアなるもの』の著者がマフィア捜査に直接的な経験があることは分かっている。出版社は、全権を持った弾圧者であり、マフィアに関する本を書いているモーリの前例に言及しているが、それはカンディダの視点が弾圧者のそれではないことを明確にするためである。実際のところ、このシチリア出身でない人物は、偏見を持たずにシチリアにやってきた。そして広範な犯罪現象に直面し、それを開けた感受性と、結果に責任を持つ勇気ある男として、説明しようとした。彼はその本をマフィア的犯罪への戦いで倒れた憲兵隊員に捧げようと考えたが、「マニ教的」意図はなかった。つまりマフィア的シチリアの暗い現実、「警察力」の光を対置しようとはしなかった。彼にとってマフィアは非常に複雑な問題で、犯罪の現象学のみでなく、それを条件付けている、大小様々な、あらゆる原因の中で評価すべきものなのである。こうした人に告発のみを求めるのは、求めすぎであることが分かる。彼はアグリジェント県の町、ファヴァーラについて、「マフィアは非常に有利な社会環境の中で繁栄している」と書いているが、こう書くだけで相当なことである。「なぜなら人々の生活水準は非常に低く、労働の機会は少ないからである。人口の28%しか働いておらず、初めての職を待つ若者が千人ほどいる…2万5千の住民に、家は6千軒ほどである。そのうち、1300軒に水道と便所がない」パルマ・モンテキアロに関しては、「人々の65%以上が文盲で…数千の男たちが一年中無為を強いられている…県内（アグリジェント県）のすべての町の中で、登録されたトラコーマ患者の数は最も多い」シクリアーナに関しては、「農業に従事する1900人中で、1600人が、一日6-800リラの賃金で、年平均120日働く日雇い労働者である」ピヴォーナの周辺地区では、「あらゆる町で児童はおぞましいほど搾取されている。12歳になるやいなや、子供たちは母の愛や学校教育から引き離され、重労働に使われるが、それは体を損ない、少年の姿を、カルーツと呼ばれる、早熟で悪癖に染まった粗野な大人＝子供の

戯画にしてしまう」カンディダはこうした具合に、アグリジェント県のすべての町について書く。なぜなら彼の本は主にアグリジェント県のマフィアを検証しているからだ。農地と硫黄鉱山に結びついたマフィアだが、ギャング的犯罪形態に進化しつつあるのである。

カンディダの主たる主張は以下のようなものだ。シチリアで起きるいかなる犯罪も（いわゆる名誉の犯罪は別である。そしてこの犯罪にもかなりのマフィアの「みせかけ」があることを考えるべきである）、マフィアの埒外で起きることはなく、人間や所有物に対する違法行為は、直接的ではないにしても、少なくとも「名誉ある社会」の暗黙の承認によって行われている。あるいは、言い換えると、犯人の特定が、実質的に不可能ではないにしても、難しい、あらゆる「不明瞭な」犯罪は、マフィアによりなされている、あるいは少なくとも裏書きがされている、ということだ。こうした犯罪はほとんど解くことができない保護の網の目 — 黙約、アリバイ、経済的保証 — のもとにある。一方他の犯罪は、言葉の本来の意味で、覆いが取れていて、犯人が分かっている。その結果として（この結果についてカンディダは口をつぐんでいる）、近代的捜査態勢の整っていない警察は、非常に高い非逮捕率を何とか下げようとして、マフィアの中から出てくる「密告者」を使うよう強いられる。

ここで「密告者」の人物像について、小さな逸脱をするのは、さほど不適切なことではないだろう。彼は法に触れた経験があり、法律を恐れているが、自分が属しているマフィアも恐れている。警察に脅されているが（ここでは用いるべき他の言葉を知らない）、組織への裏切りを、命を代償に支払うことに常におびえている。そこである時点で、マフィアの仲間に疑われるか、ことが露見して、逆の脅しを受けることもあり得る。つまりマフィア自身が周到に用意した、操作された情報を、警察に漏らすように強いられるのだ。こうした状況では、警察は逆説的状态に陥ることになる。例えば普通は流血沙汰になる二つのマフィアのグループの抗争が — 「密告者」の功績により — 一方のグループに有利になるような警察の介入で終わることもありうる。流刑もこうした遊戯を手助けする可能性がある。衆知のように、この刑は、警察署長や憲兵隊の上級将校が重要な役割を果たす、県単位の委員会で決定される。この委員会は実質的には彼らの提案や指示に従って機能している。流刑は、憲兵隊や警察が社会的に危険とみなした前科者に課されるもので、その「危険性」には判事のもとに提出すべき証拠がない場合もあり得るから、流刑に処すという脅迫が、「密告」を引き出すのに十分なことは理解できるだろう。しかし一方では、マフィアが二つの党派に別れているところでは、「密告者」がある一方の党派に損害を与えるような情報や、いずれにせよ好ましからざる人物の排除を可能にする情報を、警察にもたらしることがないわけではない。もちろん警察の目的は同じように達成される。なぜならいかなる場合であれ、社会的に危険な人物が流刑に処されるからである。そしてあるマフィアの党派も、まさに警察の助けを借りて自分の敵を排除することで、その目的を達成することになる。

しかしこうした「密告者」の存在は、マキャヴェッリが言うところの、事物の具体的現実を考えようとするなら、警察を責める理由にはならない。フラ・ディアヴォロとあだ名された山賊が逮捕された時、自分はメッサーナ警部の「密告者」だと告白したことがあった。それに対して、議会では野党の側から大きな抗議の声が上がった。それは警察がいかなる犯罪に相対しても、普通の市民と同じ状態にいることを考慮しようとしなかったからだ。警察の目の前には沈黙や黙約の壁がそびえ立っている。科学的設備は持ち合わせていない。そして今では望み通りに「拘留」の期限を延長する方策も持っていない（非常に議論の余地のある方策であるが）。「密告者」を奪われたら、警察はい

わゆる激情の犯罪だけしか扱えなくなるだろう（一つの指紋の発見が事件の決め手となるような犯罪があったとしても、シチリアの警察がこうした指紋検出の重要性を強調した例をいまだかつて見たことがないことを考えてほしい）。

マフィアの党派分裂について、カンディダの本は貴重な情報を与えてくれる。大筋では、その分裂は老人と若者との古い対立から生じていると言える。老人は安楽と「尊敬」の地位を得ていて、過剰な危険のない生活、という理想に傾きがちである。若者はこのような予防的保護から逃れ、さらに危険を冒したいと望む。要するに「成り上がり」たいのだ。老人は入札、商業、採掘産業に影響力を持つことに満足している。若者は思慮分別なく、組織の存在自体を危険にさらしながら、あえて誘拐や路上強盗を企てる。そこで老人はすでに述べた「密告」を通じて、責任を分割し、明確化しようとする。それはもちろん若者の血まみれの反撃を引き起こす。確信を持って「秩序の側の人間」になったこの老人のマフィアのボスが、政治においていかなる政党に属するのか、言うまでもない。一方若者はばらばらで、左翼政党に向かう事例もまれではない。

左翼のマフィアについては、カンディダより以前には、だれも語っていない（今までは左翼政党がマフィアに対する戦いの基本要素を独占してきた）。しかしそれは存在するし、アグリジェント県の数多くの町で、中道右派のマフィアを組織的に打ち負かすのに成功している。だがそのことは、マフィアの本質が、前に述べた秩序の理想にあることを否定するものではない。しかしそれでもシチリアでは、政党の選択は政治的理想とは関係のない事情で決められることを考慮すべきである（日雇い農業労働者は例外で、宗教的希望を抱きながら、共産主義の旗に従っている）。つまりグループ、家族、あるいは単純に個人的な対立関係によって、さらには嫉妬やうらやみによって決められるのだ（メネズ・ピダルは自著の『スペイン史入門』の一章を、うらやみの感情について割いている。彼はそれをスペイン文明の遅延要素としてとらえているのだ。シチリアについても同じような論議が必要だろう）。私はグッロ法の適用を粘り強く推進していた、ある共産党の幹部を知っているが、彼の小作人が生産された小麦の4分の3を要求した時、彼は驚き、悲しんでこう言ったのだった。「何だ、私にもたてを突くのか？」これが例外などと信じてはいけないのだ。

左翼がマフィアについて階級主義者的理解をしていることが妥当だとしても、報道記事の地平では、アグリジェント県の町々でマフィアと左翼政党との間に対立があることを無視してはならない。私は労働組合員のサルヴァトーレ・カルネヴァーレ⁷⁾の生涯に関する小冊子に目を通しているが、彼は疑いの余地なく、マフィアの判決によって消されたのだ（『赤い小麦』アヴァンティ出版、1956。カルネヴァーレについてはカルロ・レーヴィ著『言葉は石』の素晴らしい数葉も参照のこと）。この小冊子は良く書かれた記録資料である。しかしある箇所、労働組合員や左翼の代表者の、マフィアによる犠牲者は、今までに38人に上ると書いてある。これは思い違ではないか、という疑いが生じる。なぜなら「外部の」犯罪と「内部の」犯罪を区別する必要があるからだ。そしてこの38人の中で、「内部の」措置で、政治とは関係のない理由で、抹殺されたものがないか見る必要がある。だが同じことだ、我らが修辞学の国では死者はいつも役に立つのである。

批評の側から、カンディダの本に投げられた最も強い非難とは以下のものだ。つまり著者は政治的告発という結論から逃げているというのである。しかしカンディダが文書庫の未発表の素材を提示し、事実を物語ることに限定して、自分自身の判断を、他人の判断と報道記事の選択に込めているのは明らかである。これは慎重さ以外に、騒ぎを引き起こさないという考えにも裏打ちされた措

置である。なぜなら、率直に言えば、名前の暴露やほめかしの遊戯は、本の本質的内容に何も付け加えないだろうからだ。多少なりとも我々全員は、マフィアがいかにして選挙のゲームに入り込むか知っているし、自覚してか、そうでないのか、選挙におけるマフィアの便宜を享受している国会議員の名前を知っている。これは昔からある話だ。

例えば、レオポルド・フランケッティの「シチリアの政治・行政状態」に関する報告書はこのように書いている。

支配階級のある一員が犯罪者の階層の存在から得られる利益は、大多数の場合、間接的である。彼はほとんど、殺人や、脅迫の命令を出す必要はない。生活の普通の流れの中で、彼が罰せられることなく自分の意志を通すためには、彼がマフィアと同盟しているという評判だけで十分である。マフィアは最も尊重されている勢力なので、それを使うものは他の暴力手段を使うものに確実に勝てるし、マフィアを使うもの同士では、最も恐れられている党派と結ばれたものが確実に優位に立てる。さらにマフィアは、その権威を用いる時、最小限の場合を除いて、実際に暴力をふるったり、直接的に脅迫する必要はない。

おそらくシチリアを知らないものたちの空想の中では、支配階級の成員とマフィアとの共犯関係は、秘密の集会や会議で、裁判や決疑を行うことで形成される。だが実際にはそうした共犯関係は間接的な形で、「友人の友人」という輪の中で実現される。その輪はとても広いので、政治家とマフィア的組織の関係を証明するのに役立つ捜査結果を不可能にする。さもなければ、関係が直接的だが隠されている場合、「マフィアは — とフランケッティは言う — 他のすべての暴力に訴える階級と同様に、自分と関係を持ったものがそれを完全に断ち切れなくにするやり方を心得ている」のである。

政治家として歩み始めようとする時、マキャヴェッリの無頓着さで、マフィアの実験力を利用してきると考える政治家もいるだろう。彼はためらいつつも、背負い込んだ、必ずしも明確ではない責務を、いったん当選したら、果たさなければいいとでも思っているのだろう。また家族のしがらみや伝統から、周囲にマフィアを見いだすものもいるだろう。しかし自由に、ためらいもなく、こうしたやっかいな同盟を選び、道徳的な居心地の悪さをまったく感じないものもある。いずれにせよこうした個々の具体例を無視するならば、シチリアでは実際にマフィアはある一つの力である。しかし、少なくとも進行中の変身過程を成就し完成させない限りは、疑いもなく、生き残りの試みの中に置かれているのは確かだが。もし大土地所有の土地から抜け出し、都市に移住して地盤を固めることができるなら、もし州政府の官僚機構の周囲で身を固められるなら、もしシチリア島の工業化の過程に浸透できるなら、この大きな問題について、まだ長年語られるべき事態になるだろう。

(1957年)

訳注

- 1) ジュゼッペ・アレッシ (1905-2009) 大学で法律を学び、弁護士活動をへて政治家となった。1943年に、シチリアでのキリスト教民主党創設にかかわった。1956年から59年にかけてシチリア州議会議長を務め、後に国政に転じ、上院、下院でも議員として選ばれた。シチリアを代表する保守的政治家の一人である。
- 2) レナート・カンディダ (?-1988) 憲兵隊将軍。1950年代、アグリジェント県の憲兵隊本部長を務め

た。1956年に『このマフィアなるもの』を出版し、捜査の前線にあるものとして、マフィアの拡大に警鐘を鳴らした。シャーシャとは長年の友人で、『真昼のふくろう』の主人公、ベッローディ大尉のモデルになった。

- 3) チューザレ・モーリ (1871-1942) ファシズムの統治下、ムッソリーニの命を受け、1924年から29年にかけて、シチリアに知事として赴任し、強権的手法でマフィアを弾圧し、「鉄の知事」の異名を取るなど、マフィアに恐れられた。
- 4) カロージェロ・ヴィッツォーニ (1877-1954) 農村マフィアの大ボス。シチリア島西部の小村ヴィツラルバに生まれ、カルタニッセッタ県のみならず、州都のパレルモでも影響力を持った。ファシズム期に流刑にされたが、戦後アメリカ軍に取り立てられ、マフィアの大ボスとして君臨した。
- 5) ヴィート・ジェノヴェーセ (1897-1969) イタリア生まれだが、1913年にアメリカに移住し、ニューヨークで成長して、マフィアのメンバーになり、大ボスラッキー・ルチャーノの下で頭角を現した。1937年、警察の捜査を逃れるため、イタリアに帰国し、1943年アメリカ軍のポレットィ大佐の通訳になり、闇市場を支配し、巨額の利益を得た。しかし1945年逮捕され、アメリカに送還されたが、証人が死亡するなどして、証拠不十分で釈放された。その後はニューヨークのマフィアの大ボスとして君臨した
- 6) チャールズ・ポレットィ (1903-2002) イタリア系アメリカ人の軍人で、第2次世界大戦後、イタリアで連合軍軍事政府の長を務めた。1942年にはニューヨーク市の副知事にもなっている。
- 7) サルヴァトーレ・カルネヴァーレ (1923-55) シチリア島西北部のガラーティ・マメルティーノで生まれ、主にシチリア島西部のシャーラで活躍した社会主義者。農民の間で社会主義的運動を展開していたが、1955年にマフィアにより殺害された。

解 説

竹山博英

本評論の作者、レオナルド・シャーシャ (1921-1989) は、シチリア島西南部の小村、ラカルムートの出身である。この地方は農村マフィアの影響力が強かった地域だが、シャーシャは小学校の教師をへて、1950年に作家デビューし、1961年に発表した、マフィアを主題にした小説『真昼のふくろう』で作家としての地位を確立した。

この「マフィア」という評論は、1957年、『真昼のふくろう』が出版される4年前に発表されているが、その後のシャーシャの作家活動、政治活動を考えると、初期の非常に重要な評論であると評価できる。

この評論では、マフィアに関する2冊の本を論じるという形で、シャーシャの自説が展開されている。まず彼が書いているのは、マフィアを歴史的に理解することの重要性である。シャーシャはマフィアについて「常に、歴史から出発し、その中で問題を解決すべきなのである」と述べている。そしてマフィアの定義を試みる。この定義は、マフィアに関する研究が飛躍的に進んでいる現代において、どこでも引用されるものとして広範に流布しているが、書かれた当時は、目新しいものとして、注目を集めたのだった。

「マフィアとは、構成員の不法利得を目的にした犯罪組織で、所有と労働の間に仲介的要素として介入するものである。もちろんそれは寄生的仲介であり、暴力的手段で強要されるものである」

それまでマフィアとはシチリア的生き方だとされ、シチリア人の名誉に関する価値観と関連づけられて論じられていて、実在するかどうか、あいまいなものだとさえされてきた。そうした風潮に対して、シャーシャはより明快なマフィア像を提示しようと試みた。つまりマフィアとは所有と労

働の間に、暴力により、寄生的仲介として介入する犯罪組織であるということである。そしてそれは具体的には、アメリカではスト破りの実行者として、シチリアでは農地解放運動弾圧の先兵として現れる。こうしてあいまいだったマフィア像は、シチリア人のみならず、北イタリア人にも理解できるものとして示された。特にミラーノに進出しても、労働組合が根付いていて、民主的に運営されているため、マフィアは広まりにくいという点を指摘した部分は、北イタリア人のマフィア理解をより容易にするものとして興味深い。

また本評論では、ファシズムに弾圧されたマフィアが、第2次世界大戦後、アメリカ軍の手で復活されたことが語られている。このことも現在のマフィアを語る上で非常に重大なことと言える。マフィアが単なる犯罪者集団ではなく、冷戦体制の中に組み込まれた、政治的要素であったことを示しているからである。

この評論を書いた後、シャーシャは小説、『真昼のふくろう』を出版したわけだが、この評論には『真昼のふくろう』を先取りした部分がある。それは「密告者」に関する部分だ。シチリアの警察は科学的捜査に遅れているため、犯罪捜査は「密告者」に頼らざるを得ないことが書かれ、さらに「密告者」の密告が、マフィアの抗争に利用される可能性にも言及されている。この要素は『真昼のふくろう』でうまく生かされていて、犯罪が起きると、捜査を指揮するベッローディ大尉はすぐに「たれこみ屋」のカロージェロ・ディベツラと接触するのである（「たれこみ屋」は重要な情報を漏らした後、即座にマフィアの手で消されてしまう）。

本評論で扱われているマフィアは、農村地帯から都市に進出しようとする過渡期のマフィアである。それは様々な暴力事件を引き起こし、社会秩序を危うくしていた。またその先行きが不透明なことから、大きな社会問題となっていた。そのような現実を小説の世界に移したのが『真昼のふくろう』である。

この小説では3つの殺人事件が起きる。ある建設業者がまず殺され、狙撃者を目撃した目撃者、そして「たれこみ屋」が殺される。建設業者は小さな建設協同組合を作っており、社会主義者で、マフィアの仲介的保護を拒絶していた。そのためマフィアに消されてしまったのだ。北イタリアでは根付いている民主主義的組合思想がシチリアでは根付きにくいことが、この殺人事件で如実に示される。そして捜査に当たるベッローディ大尉も、真相を突き止め、犯人を逮捕しながら、マフィアを保護する政治家たちの介入のために、証拠をうやむやにされ、犯人釈放を余儀なくされる。そこにシチリアでの「正義の挫折」が描かれるのである。

本評論の末尾で、マフィアは「生き残りの試みの中に置かれている」とシャーシャは書いている。マフィアは1950年代から60年代にかけて、農村地帯から都市へと進出した。その契機になったのは、建築部門の公共事業支配と密輸たばこ、麻薬の密売だが、本評論を書いた頃、ちょうどそうした過程が進行中であった。シャーシャはその過程を固唾を呑んで見つめていただろうが、おおいに危惧もしていて、「この大きな問題について、まだ長年語られるべき事態になるだろう」と結んでいる。まさにシャーシャの懸念通りに、マフィアは1980年代、90年代に、様々な流血事件でイタリア社会を震撼させる。本評論はマフィアの実像を明示し、その危険性を指摘した啓発的文章として歴史的価値を持ち、その重要性は今日でも揺るぎないのである。

(本学文学部教授)